

にてたれみそをかけ候、くひやう兩やうに申候、一には當季を殘して、よの二季くづしてくふべし共云、又三季ながらくづしてくふとも申候、但當季を殘したるが能候とやらん申候、但今思案致候へば、もと三候つるは、三季ながらくづされ候て、御前よりあがりたるやうにおぼえ候、いかが、○下

〔奉公覺悟之事〕一三峯尖の事、殿中にて御一獻に參候、まかれ共まれ成義候、一段ほんそうの一獻に出候事候、先四季土用の色を、其時の季どもに初中後三季の色をもる也、春は青、夏は赤、秋は白、冬は黒、土用は黄也、もり物は、まやうじたるべし、折こしらへ候、しなの入道作之也、○圖くひやう色々口傳在之、あけざまに三の上をはしにて、そとくひてあけ候事故實也、是もかんの類たるべきと也、

〔婚禮法式〕上婚迎之部

一御夫婦御著座待女房も座せられ候事、○中五獻目羊羹。又はすいせんかん。ニても、是も點心にて候間、添肴出候、添肴はむし蛸を羊羹の膳ニ組付て出候、

〔祇園會御見物御成記〕大永二年祇園會爲御見物御成之時、從上平御一獻ニ付而次第、

獻立○中

七こん やうかん 御そへ物さしみ

蒲鉾

蒲鉾ハ、魚肉ヲ細切シ、石臼ニテ磨シ、小竹幹ヲ心トシテ製シタルモノナリ、其形狀ノ蘆花節チ蒲鉾ニ似タルヲ以テ名トセリ、後ニハ板面ニ貼シタルヲ蒲鉾ト稱シ、竹幹ニ貫キタルヲ